全国外大連合憲章調印式挨拶

京都外国語大学　学長　松田　武
（２０１４年６月２６日　学士会館）

全国外大連合結成の今日的意義について

この度は、日本の七つの「外国語大学」すべての合意のもと、「世界諸地域の言語と文化・社会に関する専門学術を教授・研究し、国際社会の一員として世界に貢献しうる人材を育成する」ために、全国外大連合を結成する運びとなりました。本日、調印式にご臨席いただいております韓国外国語大学校の皆様にも厚くお礼申し上げます。全国外大連合憲章調印式が挙行されるに当たりまして、本年秋に開催予定の全国外大学長会議の当番校でありますことから、まことに僭越ではございますが、本日ご列席の皆様を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。

はじめに、外国語大学設立の歴史とその展開を概観し、本日の全国外大連合の位置づけと連合結成の今日的意義について私見を述べさせていただきたく存じます。

今からちょうど１００年前の十九世紀末から二十世紀初頭にかけてのことです。過当競争による無秩序状態に終止符を打つことにより世界不況を克服しようと、「組織化か、さもなければ衰退の道（Organize or Perish）」の掛け声のもとに企業の大合同が合衆国をはじめ世界各地で展開されました。それから丁度一世紀を経た今日、私たちは、高等教育機関においても大合同が国内外で加速的に展開されているのを目の当たりにします。私は、本日の全国外大連合憲章調印も、この歴史的展開の一コマと捉えています。

日本の外国語大学は、近代国家の建設のために日本政府のイニシアティブと指導の下に開設されました。その最初の例が、日本の近代教育の黎明期に当たる１８７３年（明治６年）に開設された東京外国語学校（現東京外国語大学）であります。その当時の国家目標は、西洋諸国による植民地化を避け、短期間で日本の近代化と殖産興業をはかることでありましたが、国力の増大に伴い、国家目標はアジア大陸への進出と帝国の建設へと次第に拡大していきました。外国語の知識と技能を身につけ、翻訳や通訳の作業を通して先進西洋諸国の文物を早く日本に紹介すること、それが外国語大学に期待され割り当てられた役割でした。その特徴は、西洋の文物をもっぱら一方向的に（one-way）、がむしゃらに「まねぶ」こと（imitate and learn） にありました。そうすることで日本の近代化と国の発展に貢献するというものでした。

したがいまして、この官立外国語大学の設置ならびに外国語教育は、明確で強い目

的意識と強烈なナショナリズムによって支えられていました。そこで必要とされた語学力は、あくまでも手段であって目的そのものではありませんでした。多くの場合、西洋文化の翻訳作業に携わった人たちは、しばしば「通辯」という尊敬の念とは程遠い侮蔑的な響きの名で呼ばれ蔑（さげす）まれてさえいました。

外国語大学は、その設置から第二次世界大戦の終りまで基本的に近代日本の歩んだ道と二人三脚の関係にありました。言い換えれば、外国語大学は国家に寄り添う形で発展してきたのです。この外国語大学の姿勢の背後に、教員および学生の強い愛国精神と、それに官立大学として拡大発展したいという強い意向が働いていたとしても何ら不思議ではありません。このように外国語大学は、国策と密接な関係を保ちながら近代日本の歴史的発展を文化面で支えたのです。

第二次世界大戦後、日本は過去への反省から「平和的文化国家」に様変わりするために方針を大きく転換しました。そして、戦前の官立の外国語大学に加え、私立の外国語大学が数多く設置されました。２０１４年の現在、その数は合計７大学となっています。そして私たちは、外国語及び外国文化の教育と研究を通して、国際理解と日本の将来を担う次世代の指導者の育成に取り組んできました。

官立の大学に加え、戦後に私立の外国語大学が数多く設置された背景には次の三つの要因を指摘することができましょう。一つ目は、戦争の悲劇の主たる原因が外国文化についての無智にあり、二度と戦争を繰り返さないという国民の平和主義への強い信念であります。二つ目は、戦後、日本の再建と復興を支えるカギは海外貿易の振興と経済発展主義にあり、そのためには外国語の学習が不可欠であるという国民の合意でありました。三つ目は、国民一般の政治への参加ならびにエリート指導者だけでなく、国民一般の国際問題（今日でいう民際関係）への関与が大正から昭和にかけて徐々に浸透し拡大しつつありましたが、その種子が戦後日本において急速に開花したことでした。

さて、これまで私ども七つの外国語大学は、各々の歩みの中で個性を育み特色を活かしながら、外国語教育研究を通して数多くの卒業生を世に輩出してまいりました。先人たちの例に鑑みましても、外国語そして外国の歴史や文化を学ぶことによって、わが国が今日に至るまで着実に発展を遂げてきたことは公知の事実であります。

そして現在、グローバル化が急速なスピードで進んでおります。そのグローバル化の時代において外国語大学が日本社会のニーズに応えられる大学であるかどうか、外国語大学の存在理由と存在意義が問われております。

現代のグローバル社会において「国際競争力の強化」は、国を挙げての重要な取り組みの一つです。世界の国々と対等に付き合っていくためには、他国の歴史や文化を

学ぶことはさることながら、まずは「語学」そのものを学ぶことが極めて重要であると考えております。

東京大学の藤井省三教授は、外国語大学の究極の目標について著書『東京外語支那語部』の中で「一国の国情を理解するためにはその国の人間を知ることが必要であり、その人を知るためにはその人の語る言葉を知ることが必要である」と説明しておられます。言い換えれば、外国語大学における教育・研究の最終目標は、自らが専攻する外国語を話す国民の思想を理解することにあります。

このような観点から、これまで外国語大学は、わが国の発展のための重要な学びの環境を個々に提供してまいりました。しかし、昨今のグローバル人材養成に対する社会の強いニーズにより、総合大学においても「国際」、「グローバル」、「外国語」をキーワードとした学部・学科が矢継ぎ早に設置されている現状にも目を向けねばなりません。外国語大学の特長ともいえる外国語教育研究が、今や数多くの大学においても専門的に行われていることにより、外国語大学の存在が揺らぎつつあることに危惧の念を抱かざるを得ません。

この局面を打開するための策として、私たちは七つの外国語大学が手を結ぶ、つまりは「全国外大連合」という着想を得ました。そして昨年度に行われました全国外大学長会議での審議を経たのちに、今日という記念すべき日を迎えることになりました。本憲章は、東京外国語大学、神田外語大学、名古屋外国語大学、関西外国語大学、神戸市外国語大学、長崎外国語大学、そして京都外国語大学の七つの外国語大学が連携を図り、各大学の独立性を保ちながら、二十一世紀グローバル社会にふさわしい人材育成のために、七大学に共通する基本理念の実現と、各大学の豊かな個性の発展を目指していくことを目的としております。

私は、本日の調印式を機に外国語大学設置の原点に立ち帰り、外国語大学がめざす、よい社会とはどのような社会をいうのか、日本は国際貢献を通してどのような国際社会を創造しようとしているのかといった根源的な問いを発するとともに、それらの答えを求める中で外国語大学が果たすべき役割を今一度確認し合うことが大切ではないかと考えております。そのような意味で、本日の調印式が外国語大学の役割を今一度検討するとともに、必要ならばその役割を再定義する絶好の機会であると私は捉えております。そしてこれを契機に、七つの外国語大学が一つになって協力し合い、グローバル化した日本社会のニーズに真正面から応えられる大学に成長・発展できればと希望しております。

結びといたしまして、グローバル時代における外国語大学の役割について私見を述べることをお許しいただきたく存じます。私は、外国語大学の存在理由を次のように

考えております。それは、最新の海外の情報を収集し、外国文化の総体的な理解を深めることに加え、外国文化「受容」のこれまでの姿勢から、高度な外国語運用力を駆使して日本から積極的に「発信」する能動的な姿勢へと転換すること、すなわち日本からの発信を量質ともに増やし、真の文化教育の双方向の交流を通して外国人の日本理解を深めることであります。そしてその「鍵」となるのは、外国語によるコミュニケーション力の強化と、海外で外国人と手を取り合って対等で協働するタフな人材の育成にあると考えております。

同時に、外国語大学の歴史的使命は、外国語および外国文化の教育研究を通して、わが日本社会が、自由・平等・民主主義などの明るい面と、自民族中心主義と人種差別主義などの暗い面を同時に合わせもつ「近代」から、近代のマイナス面を超克した「脱近代」へと転換する上で、中心的な橋渡しの役割を果たすことにあるとも考えております。そのような意味で、私は外国語大学が長年にわたり培ってきた外国研究のノウハウがますます重要になってくると考えております。

本日の調印式は、「United We Stand, Divided We Fall.（団結すれば難局を乗り越えられるが、分裂すれば倒れる）」という英語の格言がありますように、七大学が互いに手を携えて一丸となり、これからの「外国語大学」のあり方を共に見出していくという意志を確認する場であります。今後この連携が末永く、またさらなる発展を遂げられるようたゆまぬ努力を重ねてまいる所存です。

ご多用の中ご臨席賜りましたご来賓の皆様、また報道関係者の皆様に改めて心よりお礼申し上げます。この度の協定締結が七大学間における学術振興や教育内容の充実及び発展に大きく寄与し、国内外に「外国語大学」の存在を高める契機となることを願って、ご挨拶とさせていただきます。